



日仏東洋学会通信 第四号

一九八五年九月発行

目次

フランスにおける東南アジア研究の動向……石沢 良昭……一〇三

フランス東洋学研究管見 Ⅱ 一九八四年・秋 Ⅱ

——道教・敦煌研究について——……金岡 照光……四〇六

会員総会報告……大地原 豊……六〇三

フランス東洋学関係書・新刊紹介……弥永信美・福井文雅……二〇四

日仏学術シンポジウムについて……………二四〇

………二四一

………二四二

………二四三

………二四四

………二四五

………二四六

………二四七

………二四八

………二四九

………二五〇

………二五一

………二五二

………二五三

………二五四

………二五五

………二五六

………二五七

………二五八

………二五九

………二六〇

………二六一

………二六二

………二六三

………二六四

………二六五

………二六六

………二六七

………二六八

………二六九

………二七〇

………二七一

………二七二

………二七三

………二七四

………二七五

………二七六

………二七七

………二七八

………二七九

………二八〇

………二八一

………二八二

………二八三

………二八四

………二八五

………二八六

………二八七

………二八八

………二八九

………二九〇

………二九一

………二九二

………二九三

………二九四

………二九五

………二九六

………二九七

………二九八

………二九九

………三〇〇

………三〇一

………三〇二

………三〇三

………三〇四

………三〇五

………三〇六

………三〇七

………三〇八

………三〇九

………三一〇

………三一一

………三一二

………三一三

………三一四

………三一五

………三一六

………三一七

………三一八

………三一九

………三二〇

………三二一

………三二二

………三二三

………三二四

………三二五

………三二六

………三二七

………三二八

………三二九

………三三〇

………三三一

………三三二

………三三三

………三三四

………三三五

………三三六

………三三七

………三三八

………三三九

………三四〇

………三四一

………三四二

………三四三

………三四四

………三四五

………三四六

………三四七

………三四八

………三四九

………三五十

………三五一

………三五二

………三五三

………三五四

………三五五

………三五六

………三五七

………三五八

………三五九

………三六〇

………三六一

………三六二

………三六三

………三六四

………三六五

………三六六

………三六七

………三六八

………三六九

………三七〇

………三七一

………三七二

………三七三

………三七四

………三七五

………三七六

………三七七

………三七八

………三七九

………三八〇

………三八一

………三八二

………三八三

………三八四

………三八五

………三八六

………三八七

………三八八

………三八九

………三九〇

………三九一

………三九二

………三九三

………三九四

………三九五

………三九六

………三九七

………三九八

………三九九

………四〇〇

………四〇一

………四〇二

………四〇三

………四〇四

………四〇五

………四〇六

………四〇七

………四〇八

………四〇九

………四一〇

………四一一

………四一二

………四一三

………四一四

………四一五

………四一六

………四一七

………四一八

………四一九

………四二〇

………四二一

………四二二

………四二三

………四二四

………四二五

………四二六

………四二七

………四二八

………四二九

………四三〇

………四三一

………四三二

………四三三

………四三四

………四三五

………四三六

………四三七

………四三八

………四三九

………四四〇

………四四一

………四四二

………四四三

………四四四

………四四五

………四四六

………四四七

………四四八

………四四九

………四五〇

………四五一

………四五二

………四五三

………四五四

………四五五

………四五六

………四五七

………四五八

………四五九

………四六〇

………四六一

………四六二

………四六三

………四六四

………四六五

………四六六

………四六七

………四六八

………四六九

………四七〇

………四七一

………四七二

………四七三

………四七四

………四七五

………四七六

………四七七

………四七八

………四七九

………四八〇

………四八一

………四八二

………四八三

………四八四

………四八五

………四八六

………四八七

………四八八

………四八九

………四九〇

………四九一

………四九二

………四九三

………四九四

………四九五

………四九六

………四九七

………四九八

………四九九

………五〇〇

………五〇一

………五〇二

………五〇三

………五〇四

………五〇五

………五〇六

………五〇七

………五〇八

………五〇九

………五一〇

………五一一

………五一二

………五一三

………五一四

………五一五

………五一六

………五一七

………五一八

………五一九

………五二〇

………五二一

………五二二

………五二三

………五二四

………五二五

………五二六

………五二七

………五二八

………五二九

………五三〇

………五三一

………五三二

………五三三

………五三四

………五三五

………五三六

………五三七

………五三八

………五三九

………五四〇

………五四一

………五四二

………五四三

………五四四

………五四五

………五四六

………五四七

………五四八

………五四九

………五五〇

………五五一

………五五二

………五五三

………五五四

………五五五

………五五六

………五五七

………五五八

………五五九

………五六〇

………五六一

………五六二

………五六三

………五六四

………五六五

………五六六

………五六七

………五六八

………五六九

………五七〇

………五七一

………五七二

………五七三

………五七四

………五七五

………五七六

………五七七

………五七八

………五七九

………五八〇

………五八一

………五八二

………五八三

………五八四

………五八五

………五八六

………五八七

………五八八

………五八九

………五九〇

………五九一

………五九二

………五九三

………五九四

………五九五

………五九六

………五九七

………五九八

………五九九

………六〇〇

………六〇一

………六〇二

………六〇三

………六〇四

………六〇五

………六〇六

………六〇七

………六〇八

………六〇九

………六一〇

………六一一

………六一二

………六一三

………六一四

………六一五

………六一六

………六一七

………六一八

………六一九

………六二〇

………六二一

………六二二

………六二三

………六二四

………六二五

………六二六

………六二七

………六二八

………六二九

………六三〇

………六三一

………六三二

………六三三

………六三四

………六三五

………六三六

………六三七

………六三八

………六三九

………六四〇

………六四一

………六四二

………六四三

………六四四

………六四五

………六四六

………六四七

………六四八

………六四九

………六五〇

………六五一

………六五二

………六五三

………六五四

………六五五

………六五六

………六五七

………六五八

………六五九

………六六〇

………六六一

………六六二

………六六三

………六六四

………六六五

………六六六

………六六七

………六六八

………六六九

………六七〇

………六七一

………六七二

………六七三

………六七四

………六七五

………六七六

………六七七

………六七八

………六七九

………六八〇

………六八一

………六八二

………六八三

………六八四

………六八五

………六八六

………六八七

………六八八

………六八九

………六九〇

………六九一

………六九二

………六九三

………六九四

………六九五

………六九六

………六九七

………六九八

………六九九

………七〇〇

………七〇一

………七〇二

………七〇三

………七〇四

………七〇五

………七〇六

………七〇七

………七〇八

………七〇九

………七一〇

………七一一

………七一二

………七一三

………七一四

………七一五

………七一六

………七一七

………七一八

………七一九

………七二〇

………七二一

………七二二

………七二三

………七二四

………七二五

………七二六

………七二七

………七二八

………七二九

………七三〇

………七三一

………七三二

………七三三

………七三四

………七三五

………七三六

………七三七

………七三八

………七三九

………七四〇

………七四一

………七四二

………七四三

………七四四

………七四五

………七四六

………七四七

………七四八

………七四九

………七五〇

………七五一

………七五二

………七五三

………七五四

………七五五

………七五六

………七五七

………七五八

………七五九

………七六〇

………七六一

………七六二

………七六三

………七六四

………七六五

………七六六

………七六七

………七六八

………七六九

………七七〇

………七七一

………七七二

………七七三

………七七四

………七七五

………七七六

………七七七

………七七八

………七七九

………七八〇

………七八一

………七八二

………七八三

………七八四

………七八五

………七八六

………七八七

………七八八

………七八九

………七九〇

………七九一

………七九二

………七九三

………七九四

………七九五

………七九六

………七九七

………七九八

………七九九

………八〇〇

………八〇一

………八〇二

………八〇三

………八〇四

………八〇五

………八〇六

………八〇七

………八〇八

………八〇九

………八一〇

………八一一

………八一二

………八一三

………八一四

………八一五

………八一六

………八一七

………八一八

………八一九

………八二〇

………八二一

………八二二

………八二三

………八二四

………八二五

………八二六

………八二七

………八二八

………八二九

………八三〇

………八三一

………八三二

………八三三

………八三四

………八三五

………八三六

………八三七

………八三八

………八三九

………八四〇

………八四一

………八四二

………八四三

………八四四

………八四五

………八四六

………八四七

………八四八

………八四九

………八五〇

………八五一

………八五二

………八五三

………八五四

………八五五

………八五六

………八五七

………八五八

………八五九

………八六〇

………八六一

………八六二

………八六三

………八六四

………八六五

………八六六

………八六七

………八六八

………八六九

………八七〇

………八七一

………八七二

………八七三

………八七四

………八七五

………八七六

………八七七

………八七八

………八七九

………八八〇

………八八一

………八八二

………八八三

………八八四

………八八五

………八八六

………八八七

………八八八

………八八九

………八九〇

………八九一

………八九二

………八九三

………八九四

………八九五

………八九六

………八九七

………八九八

………八九九

………九〇〇

………九〇一

………九〇二

………九〇三

………九〇四

………九〇五

………九〇六

………九〇七

………九〇八

………九〇九

………九一〇

………九一一

………九一二

………九一三

………九一四

………九一五

………九一六

………九一七

………九一八

………九一九

………九二〇

………九二一

………九二二

………九二三

………九二四

………九二五

………九二六

………九二七

………九二八

………九二九

………九三〇

………九三一

………九三二

………九三三

………九三四

………九三五

………九三六

………九三七

………九三八

………九三九

………九四〇

………九四一

………九四二

………九四三

………九四四

………九四五

………九四六

………九四七

………九四八

………九四九

………九五〇

………九五一

………九五二

………九五三

………九五四

………九五五

………九五六

………九五七

………九五八

………九五九

………九六〇

………九六一

………九六二

………九六三

………九六四

………九六五

………九六六

………九六七

………九六八

………九六九

………九七〇

………九七一

………九七二

………九七三

………九七四

………九七五

………九七六

………九七七

………九七八

………九七九

………九八〇

………九八一

………九八二

………九八三

………九八四

………九八五

………九八六

………九八七

………九八八

………九八九

………九九〇

………九九一

………九九二

………九九三

………九九四

………九九五

………九九六

………九九七

………九九八

………九九九

………一〇〇〇

フランスにおける東南アジア研究の動向

石沢 良昭

(上智大学)

フランスは一八九九年に「フランス極東学院」を創設し、旧仏領イ

ンドシナ地域と東アジアの民族・歴史・社会・文化などを研究調査する機関とした。一九〇一年に『フランス極東学院紀要(略称RIFRO)』創刊号が上梓され、以来今日まで次々と諸成果が載り、これまで世界のアジア研究、特にインドシナ研究をリードしてきたのであった。

私は一九八五年二月から二カ月間にわたり日本学術振興会派遣の研究者としてパリに滞在し、古代カンボジア碑文およびチャンパー碑文の研究を行ったが、以下は、フランスの大学における人文・社会科学関係の東南アジア研究・教育機関についての紹介である。オート・セチュードは除外した。

1 「フランスの大学制度改革」

最初に大学制度の改革について述べなければならない。一九六八年の「五月騒動」をきっかけに、旧来のエリート養成主義の大学教育が根底から崩れ、学生の急増に伴って、制度の改革、組織の再編成、学科・学群の増設・拡充などが行われ、現在も諸改革が進行中である。一九六八年十一月成立の「高等教育基本法」により全国二十三学区に七十一大学ができている(一九六八年以前は二十三大学)。例えば、旧パリ大学は、学部・分校・研究所・施設等が系統的に統合・改組・新增設されて、十三の新制パリ大学が誕生した。こうした新制大学は、旧来の学部を小規模に再編成した「教育・研究単位 Unité d'Enseignement et de Recherches 略称 UFR」が二〇以上合同して一つの大学を構成する。各大学の運営は、教官・事務官・学生・学外有識者の各代表による「大学評議員会」が執り行い、財

PW
23

政・人事・研究・教育等の面で大幅な自治が認められているが、但し、学生代表は人事に関する議決権を持たない。大学以外の大学校 (Grandes Ecoles) および諸研究機関には、だいたいこうした大学と同様の機能を持つ運営評議員会が組織されている。

2 「大学における東南アジア地域の研究機関」

新しい DER 制の創設により、旧学部の組織が解体されたが、東南アジア関係の学科・講座も再編成・改組を余儀なくされた。

(1) パリ第三大学「インド・オリエント・北アフリカ言語・文化 DER」

インド文化関係の中では美術史分野で、カンボジア・チャンパ
ー・タイの美術・考古で有名な J. Botselier [ボワスリエ] 教授、
旧ブノンペン美術館長の M. Giteau [ギトール] 助教授がいる。

(2) 国立東洋言語文化研究所 (旧ペリ東洋語学校)

パリ第三大学に付属した機関。東欧 (ルーマニア語・チェコ語・
ポーランド語など) からアジア・アフリカ・ソ連邦までの地域の
言語が全部ふくまれている。八学科七十五言語と文化の専攻があ
り、東南アジア地域は、「東南アジア・アウストロネシア・高地
アジア学科」に属し、大陸部東南アジア分科にはカンボジア語・
ラーオ語・タイ語・ヴェトナム語、アウストロネシア分科にはタ
ガログ語、マライ・インドネシア語、高地アジア分科にはビルマ
語の各専攻がある。専攻の語学以外に、各国・地域の歴史・地
理・文化・政治・社会等の科目が選択必修となっている。三年間

で卒業となっているが、卒業できる学生は入学時登録学生の五分の一くらいである。私が一九七八/七九に出席したカンボジア語専攻では、一年次生八名、二年次生三名、三年次生二名であった。三年次生の話では、入学時に十二名いたという。あたりまえのことであるが、日本の大学のように入学者がほとんど卒業することは、フランスの大学では考えられない。

この東洋言語文化研究所は、前身が一八六七年に創設され、一九一四年の国立東洋語学校令により特殊語学養成機関として存続してきたが、一九七一年二月法令により、大学令に基づくパリ第三大学の研究教育機関となった。そのために、旧東洋語学校教官は大学の教官として資格審査が行われた。いくら専攻の語学に造詣が深く、経験があっても、第三課程博士以上の学位がなければ教官として失格となる。移行暫定期間を設け、無資格教官に学位取得を勧めてきた。カンボジア語専攻の M. Midoux [ミドゥー] 教授は、東洋語学校の卒業生で、五十八才、無資格だったが、七十九年六月博士の学位を取得した。ちょうど在仏中だったので、Midoux 先生の学位公開審査に招かれたが、審査委員四名はほとんど四十代であり、教え子が二名その中に入っていた。先生は、学位取得のお祝いの席で、二十二年の教育経験を評価しない官僚的な大学当局を徹底的に批判していたが、老軀に鞭打って書きあげた論文は、さすがに先生の多年の研究成果が滲み出ていて興味深かった。

これら東南アジア地域の七専攻語のうちで、学士・修士課程が設置されているのはヴェトナム語・ラオ語・インドネシア語の各専攻だけであり、大学院有資格教官のいる専攻ということになる。ちなみに日本語科や中国語科などは博士課程までが設置されている。

(3) パリ第七大学「東洋言語・文化UER」(旧パリ大学文学部東洋科)

中国・日本・朝鮮・ヴェトナムの各言語・文化専攻がある。実用語学のスペシャリストを養成するのが東洋語学系とするなら、このUERは、語学学習を終えた後、専攻言語を使って研究をする学者・研究者を養成する機関といえる。ヴェトナム語科は、二年間が徹底した専攻語学習が行われ、ほかに、専攻の国の歴史・地理・文学、第二外国語、それに他のUERで開講している概説・入門的な共通科目から四科目を履修する。三年次では文献研究、新聞講読、文学、言語学、歴史、近代社会と経済等の科目が必修となっている。ヴェトナム民族形成史で有名なJ. Chesneaux〔シニノー〕教授、社会経済史のP. Brocheux〔ブロシェー〕助教授、ヴェトナム共産党史のD. Hemery〔エムリ〕講師、ヴェトナム宗教学史のG. Boudarel〔ブーダレル〕講師、東南アジア地理学のJ. Delvert〔デルヴェール〕教授などが担当し、N. P. Fon〔フォン〕教授(ヴェトナム人)など数人のヴェトナム人教師が語学学習を担当している。

(4) パリ第五大学教育学

第三世界の教育論の講座があり、アジア・アフリカ諸国からの留学生が多い。この講座は、ヴェトナム人のLe Thanh Khoi(レ・タン・ホイ)教授が主任であり、発展途上国経済論を講じておられる。教授は、もともと東南アジア史・経済の専門家として知名度が高く、日本でも訳本が刊行されている(『東南アジア史』石沢良昭訳 白水社、『東南アジアの経済』黒沢一晃訳 白水社)。また、東京の国連大学のアドヴァイザーも兼務されている。

(5) ニース大学法経学UERおよび文化

東南アジア経済学、特にインドシナ植民地社会経済史および第三世界経済論の講座があり、大学図書館に収蔵されている旧インドシナ総督府関係の資料を利用できる。特に、Paul Isoart〔ポール・イズアール〕教授は、ヴェトナム経済の専門家であり、パリでは参照できない貴重な文献を使ってすでにたくさん論文・著書を著わしている。ほかに植民地地理学のH. Isnard〔イスナー〕教授がいる。

文化UERには、ヴェトナム現代史の講座があり、クセジエ文庫に『ヴェトナム』を書いたP. R. Ferry〔フェレ〕教授が二十世紀ヴェトナム論を講じている。

フランス東洋学研究管見 一 一九八四年・秋 二

道教・敦煌研究について

金岡 照光

一、キエがき

筆者は昨年（一九八四年）十月末日より、十一月末日まで、約一ヶ月間、フランス共和国政府外務省の招聘で、招聘教授（Professeur invité）として、パリに滞在した。たかたか一ヶ月間の滞在であるし、公務として接触した教育・研究機関も限られたものである。到底フランスの東洋学の全貌などは窺い知るすべもない。従って本稿では、一九八四年の一時期における彼地斯学の一面を紹介するに過ぎない。

筆者の渡仏は前日仏会館学長レオン・ヴァンデルメールシユ（Léon Vandermeersch）教授の御推薦と、パリの高等研究院（École Pratique des Hautes Études）の宗教部門（Ve section—Sciences Religieuses）のクリストファー・シッペール（Kristofer Schipper）教授及び同研究院のミシェル・スワミエ（Michel Soyrie）教授の御斡旋によるものであった。これは年に一人乃至数人、同国外務省を通して日本人研究者を招聘する慣例に従った措置の一つである。従って、到着時より公務のはじまる迄の受け入れ、資金支給、案内等は、以下の機関が責任を持つ。

Bureau d'organisation et de coordination des visites de personnalités étrangères

日本での窓口は駐日フランス大使館文化部である。それ故、筆者が早朝シャルル・ド・ゴール（Aéroport Charles de Gaulle）空港に到着したとき、筆者の姓名を記したブラカードをもって出むかえに出てきたのは、右外務省機関のコックレイ夫人（Mme Nicole de Cocquerey）という方であった。もっとも、直接受け入れの研究機関の責任者として、シッペール教授がわざわざ出むかえて下さり、同教授の車で宿舎までみちびかれた。外務省のコックレイ夫人は、その後、筆者担当の接待員として、各研究機関の案内、美術館、博物館、図書館への案内や手続きの執行、はてはシャルトル大寺院や、ヴェルサイユ等の観光に至るまで、筆者の落ち着いてから仕事の始まるまでの間、連日のように車で送迎をしてくれた。各招聘者に恐らくそれぞれにこうした接待員がつくものと思われ、特に英語に堪能な係員がえらばれているのも、外国人の接待を意識しての措置と思われた。

しかし乍ら、そうした公的接待機関の扱いもさること乍ら、シッペール教授は、筆者滞在中、公私ともに誠に隔意なく且つ行き届いた御世話をして下さい、今回の滞仏中、同教授との友情を繋ぐことができたのは、最大の収穫であったといっても過言ではない。

ヴァンデルメールシユ前学長は、筆者が到着の折はまだ南仏に滞在中であったが、滞仏半ばにしてパリにもどられ、万般御世話になった。前記スワミエ教授は、約三十年前、同教授が日本留学中からの知己で

あり、筆者の数次の訪仏の折にも種々お世話になっていたが、今回の滞仏の折も同様であった。その他コレージュ・ド・フランスのベルナール・フランク (B. Frank) 教授、国立図書館の東洋写本部主任ニール・コヘン (M. Cohen) 夫人、呉其昱博士、アジア研究所敦煌研究室のダニエル・エリアスベルグ女史 (D. Elisberg)、郭麗英女史、滞仏中の京戸慈光氏等の公私にわたる御幹旋・御指導に対し、冒頭で感謝の意をささげておく。

なお、滞仏中のことについて、今後、筆者と同じケースで彼地にわたる方に必要と思われることについて、一、二附記しておく。筆者のような招聘者のオブリゲーションは、数回の講演・研究発表・特別講義を行うのみで他の義務はない。中には一回だけという方もあって、それでも差し支えないようである。また宿舎は、筆者はシッペール教授の幹旋で大学都市の国際会館 (Cité Universitaire, Maison Internationale) の一室を借りることが出来たが、これは招聘者が誰でもそうなるというわけではなく、別のホテルの幹旋をするということもあるそうである。もちろん訪仏者の希望もあるであろうが、大学都市は、今かなりの過密状態で、その借用には、あらかじめ、かなりの準備を必要とされているようである。

二、道教研究について

筆者の今回の滞仏は、大別して二つの目的を有していた。一つは彼

地の道教研究の視察と交流、二つは敦煌研究の現状の調査である。

オブリゲーションも、高等研究院における道教に関する特別セミナーと、アジア研究所 (Institut d'Asie) 敦煌研究室 (EKA. 438) における敦煌関係の公開講義とに分かれていた。(筆者が滞仏中に行ったセミナーの一部は、最近他の紙面に発表してあるので、ここでは一切省略させて頂く。)

先ずその道教研究に関する方面について、現状の一部を紹介して見よう。筆者の滞仏中における道教研究は三つの場所においてなされていたといつてよい。一つは前記高等研究院の宗教研究部門であり、二つはアジア研究所内の道教研究プロジェクトであり、三つはクリストファー・シッペール教授の自宅である。

この中第一の高等研究院は周知の如くソルボンヌにあるが、今ここには、所謂研究室の設備らしいものはない。筆者が特別セミナーに行った時も、時間の合い間に教授たちが休憩する小部屋とセミナーのための小教室があるのみであった。筆者が参加したのはシッペール教授のセミナーであった。本来ならば十月以降に開講となっている同教授のセミナーも実際上は、十一月半ばになってから開講する。筆者が担当したのは、シッペール教授の通年セミナー開始前の特別セミナーという形において行われたのである。聞く所によれば、大方の教授(正式には Directeurs d'études) の講義も、十一月乃至十二月に入ってから開かれるようである。シッペール教授の場合をとって言えば、毎週金曜、午後二時から四時まで、間に十五分程度の小憩をとって行われ

る。聴講者はフランス人学生を主として、世界各国からの留学生（中国、台湾の留学生が主）で、おおむね学部を終了した日本でいえは大学院生に相当する人々であるが、別にその人々に限られていたわけではない。筆者の特別セミナーに先立ってシッペール教授が最初の時間に本年度の講義のイントロダクションをされたが、前記院生諸君の他に、他の大学院に在籍の人、高等研究院の他部門の教授、退休された教授、あるいは現在は自適の生活を送られている老人夫婦等様々な人がいて、彼等も、シッペール教授の廻された聴講者名簿に名前を記入すれば、聴講することは一向にさしつかえないのである。この点については本誌二号で興膳宏教授も触れておられる。開講時における人数は二十数名であった。

前述の如くシッペール教授は、このセミナーの開講時に、本年度の講義内容を説明された、それは誠に周到な準備の下になされたものであった。同教授の正式講座名は、高等研究院第五部門（宗教）の中の Religions de la Chine であり、この中国宗教に関して、二つの講座がひらかれており、一つはシッペール教授の講義で、Recherches sur le rituel taoïste（道教科儀の研究—今年度は特に代人、替身について）と題され、もう一つはヴァンデルメルシュ前学長の La Scolastique confucianiste sous les Han: neo-canonisme et archéo-canonisme と題する漢代儒家思想、とくに金石文等の新出資料を用いた講義であった。これは土曜日の十時から十二時まで行われているとのことであった。残念ながらヴァンデルメルシュ教授は、日本より帰国の途次、

各国を歴訪され、南仏にとどまっていられた為、その開講は、十二月近くになるとのことで、筆者はその講義の一端に連なることができなかった。ここでは筆者が特別セミナーを実施したシッペール教授の場合について見よう。

開講に先立って、シッペール教授は、新聴講生に対し、英文による An outline of taoist ritual というダブルスペース十四頁にわたるコピーを配布した。蓋し、これは参加者が新入生のため未だ道教及びその儀軌に関し、初学のものがあることと、留学生でフランス語に通曉していないものがあることを考慮して、英文の入門を必要とした為であろうが、きわめて行き届いた入門としての性格を具えていた。

A) Definitions において、道教、儀軌等の術語の定義を述べ、B) Sources において必要な資料、文献を簡明に指示し、C) Ritual in society において道教儀軌の社会生活中における位置を明らかにする。以上を総論として、第二章は Structure とし、Basic forms, Basic forms of the ritual area, Denominations of rituals, Syntax に分けて詳述し、第三章は Meaning—Preliminary remarks on works, singing, and the notion of substitution と題し、道教儀軌の各種の動作、法具、言語、歌謡について概述する。

その D) implied meanings, added values of rites and overall interpretation of ritual accretion の各節にわたって詳述したのを Conclusion とし、Methodology for the study of ritual とし、道教儀軌研究方法を述べて完結する。新入学生用の入門としては、きわめて明

快であるばかりか、道教入門、問題の所在、方法論上の諸問題を述べたものとして、かなりハイ・レベルなものである。筆者を含め、自己を顧みるとき、果して、学部、大学院のゼミの導入に、これだけ質量そなわった教材を与えうるかどうか、やや後めたさを感じざるを得なかった。高等研究院の諸教授が果して、すべてシッペール教授と同じようなやり方をしているかどうかは知る限りではないし、また同院の教授は講義はおおむね右の如く週二時間(百二十分)がオブリゲーションで、雑務は一切なく、講義期間も一応十月に始まり、翌年の六月までと定められてはいるものの、教授者がその年のテーマについて講じ終われば何時終業しても差し支えないという自由を有していること等、一言にして言えば、教育と研究が一体化している点、日本とはかなり事情が異なっているとは考えられるものの、このような教授者の訓練を受ける学生の成長は期して俟つべきものがある。もっとも本邦では、きわめて教育のオブリゲーションが少くとも、さしたる業績を挙げ得ぬ者がいることを思えば、これは制度の問題ではなくて、教授者、研究者の意識の問題かも知れない。

ともあれ、高等研究院の講義は、講義即研究という形の、密度の高いものであったことは確かである。しかもこうした講義のレジュームは、その年度終了とともに、高等研究院のアニニエールとして刊行されるのみならず、他の刊行物でも公刊されるようで、その義務は各教授のかなりな負担となっているようである。現にシッペール教授の本年度の講義もすでに印刷にかかっており、初稿を見せていただいた。こう

した研究の義務を伴う講義ではあるが、ソルボンヌの高等研究院の建物自体には、すでに各研究室、研究所の施設はなく、それらはすべて地下鉄トロカデロ駅近くの、ブレジダン・ウィルソン通りのアジア研究所に移されている。

従って筆者の滞仏中の道教研究の主要なる場所としては、同研究所の道教研究室に触れなければならない。

アジア研究所は、フランスの東洋学研究所のセンターであり、中国研究所も、ここに包括され、インド、日本の研究所も、同一のビルにある。しかし相互に交流し合うことはあまりないようである。シッペール教授が主宰する道教研究室もその一角を占めている。

この研究室は、正式には道蔵プロジェクト(Projet Tao-Tsang)と称しており、東洋学資料センター(Fondation Européenne de la Science, Ecole Française d'Extrême-Orient)の所在場所であり、国立学術研究センター(C.N.R.S. の P.C.P. 625 という研究班の部屋であり、汎ヨーロッパ道蔵研究会(Centre de Documentation et d'Etude du Taoïsme)の事務局兼研究室でもある。

筆者が訪れた折は、シッペール教授の主宰の下に、コンピューターによる道教関係のデータ・バンクが、すでにフル回転しており、膨大な道教関係資料が、すべて縦7cm、横10cm程度のフィルムに処理されており、今後世界の道教研究者の希望に応じて、その需要を満しうるようになっていて、室内にはその端末器がそなえられ、同研究所のセンターと電話連絡により、何時でも内容別のデータがとりよせられる

ようになっていた。同研究所には中国人、フランス人助手が常在しており、この作業に当たっていた。シッペール教授は、このデータ・バンクの作業を広く日本の道教研究者にも検討して貰いたい旨を語り、本年（一九八五年）秋の日仏学術シンポジウム東洋部門（道教）の折、来仏される日本の研究者たちと是非こうしたデータ処理のやり方について意見を伺いたいとのことであった。研究室のメンバーは、すべて研究所の正式研究員か否かは明らかでないが、おおむね、前記高等研究院のシッペール教授のゼミナリストと重複しており、本年の日仏シンポジウムの構成メンバーでもあるようであった。なお同教授について見聞した本研究プロジェクトの現在及び将来にわたる作業の主なものは、左の通りである。

第一には道蔵そのものの再検討である。

大明正統道蔵と今日の台湾版道蔵は、同じく正統の名を冠するも、その内容において一致しない点が多い。この両者を対校しながら、道蔵所収經典の新しい工具書を作成しつつある。中国大陸本土においては、すでに道士が絶滅に瀕しているので、明代道蔵についての蒐集整理はきわめて不分明な状態となっている。台湾においては、道士はなお現存しているが、道教研究そのものが極めて低調で、研究者の数も少ない。従って同教授のグループのこの作業は、きわめて吃緊事である。その中でも特に研究の重点がおかれているのは、第一には道蔵中の儀軌についての研究であり、これはシッペール教授の高等研究院の講義とも、その内容を一にする。第二には、史書、道蔵中における道

教術語の蒐集と正確な概念規定の問題である。この作業は一九七八年以降ヨーロッパ全体の学会の共同作業として実施されつつあるが、なお整理、再検討を必要とするので、これらについても、本年秋渡仏する日本人研究者と十分討議を重ねたいとのことであった。

さらに現在そのいくつかが公刊されている各種インデックスを中心とする工具書の作成及び、道典の分類の方法上の諸問題である。これまた一九八五年の学会で、日本人研究者に提示することであった。この分類については、従来の目録学上の方法にのみ頼っていると些か不都合が生ずる。まず韻によって分類する方法は、あまり正確な通検を提供することはできない。それは道典に偽書が多いからである。たとえば「周易参同契」は「淮南子」と同系の韻を用いているため、前漢のものかどうかは判定し難い。音韻による分類方法は、安心して用いられない。従って、分類方法（クロノロジイを含めて）は、一つは經典中の引用文献によって分類する方法、二つには「演出」（道教用語が南北朝以降、急速にその内容を変化させていったという事実をさす）の過程を考慮におき乍ら、編年分類を行わなければならない。たとえば天師道道教における戒律は一八〇戒から二四〇戒に、さらに三〇〇戒へと変転して行く「演出」過程をもつが、これらの術語の内容の変化を、それぞれの時点で、背景を考慮に入れながら分類し、通検を作成しなければならない。

また道教神の名前の増加を考えて、これを編年方法の資料として行かなければならない。新しい神々の名が時代とともに増加して行く傾

向があることは周知の通りである。これらも、分類、編年の重要な要素となる。もちろん文字の異同、字体の検討等、一般的な書誌学上の考証は、基本作業として進めて行くことは言を俟たない。以上のような諸点を考慮に入れて、テキストの真偽、時代の推定を、同グループの各員が分担しつつその作業を推進しているとのことであった。要するに資料としての道蔵を、歴史的方法により厳密に分類し、その工具書を作成して行くという作業が行われ、それは各時代における道蔵収録経典の成立過程を知り、テキストの真偽を定め、時代考証を厳密にすすめ乍ら、研究業績を公刊して行くことを目指しているものである。

このような方法にもとづく作業は、すでにシッペール教授のプロジエクトのメンバーにより、徐々に公刊されつつある。これらの既刊の業績については、本学会主幹福井文雅博士の紹介もあるので、ここでは省略に従う。(福井文雅「最近の道教関係欧文文献」(1)(2)。『東洋の思想と宗教』創刊号・第二号・一九八三年・一九八四年)
一応主なる書名のみを挙げておけば左の通りである。(シッペール教授のプロジエクトのメンバーの刊行物に限る)

ジョン・ラガウェイ (John Lagerwey)

无上秘要 *Wu-shang Pi-yao* (1981)

シッペール教授他

靈寶七籤一字索引 *Index du Yunji-qiqian* (1981~82)

シッペール教授他

黄帝経本文一字索引 *Concordance du Huang-ti: Nei-King et*

Wai-King (1975)

ピエット・ヴァン・デル・ルーン (Piet Van der Loon)

宋代収蔵道書考 *Taoist books in the library of the Sung*

Period, Oxford Oriental Institute Monograph 7, 1984

イザベル・ロビネ夫人 (Isabelle Robinet)

道教における上清派の歴史的意義 (福井文雅博士訳題)

La Révélation du Shangqing dans l'histoire du taoïsme, 2 vols,

1984, Publications de l'Ecole Française d'Extrême-orient vol.

CXXXVII.

ロビネ夫人は現在マルセイユ大学の助教授に転出されている由であるが、高等研究院のシッペール教授のゼミナール及びアジア研究所のプロジエクトにも参加しておられたので、ここに挙げておく。これらを含めてシッペール氏のグループのみならず、ヨーロッパの道教研究の近年の業績については、前掲福井博士の論文を参照されたい。同グループはおおむね若い研究者を中核としており、日本留学の経験あるアリストン (D. Allstone) 氏、カリノフスキー (M. Kalinowski) 氏らは日本語は堪能であり、中国人女性も多く、シッペール教授の前記各種索引の共著者となっている場合も多い。以上の作業を通じて、こうした若い研究者を育成して行く方針とのことであった。

従って本邦に比し、研究者の年齢層は比較的若いし、こと道教研究については、その人数はやや少いが、その将来の実力については、かなり期待できるものがあるようであった。彼地の東洋研究者は、よく

「日本は研究層が厚い」ということを、讚美とも御世辞ともつかず述べられるが、これが「人数」の多さだけを意味するもので、実質的な「層」の厚さにつながらない場合が多いことを反省させられたのである。

現在同プロジェクトにおいて進行中の作業は、道教のビブリオグラフィの作成である。これは唐・宋書の芸文志は、必ずしも資料的に信頼すべきものではないので、直接道藏に依拠しつつ作成して行く予定とのことであった。たとえば現在北京の科学院でも作成中と伝えられる「受籙次第法信儀」の如きは、本年（一九八五年）の日仏学術シンポジウムには、間に合うように公刊されるであろうということも洩らされた。

今後の大きなプロジェクト全体の課題としては、刊本のみならず抄本も及ぶ限り蒐集し、道教の抄本、刊本のあらゆる異本を校合し、信頼のおけるテキストにもとづいた、完璧な道藏經典提要を作ること、そのことは同時に大明正統道藏をさらに厳密に校勘した、真に依るべき重印道藏を作成することを目的とするものである。

以上がアジア研究所の道藏プロジェクトにおける作業の概要である。筆者のフランスにおける道教研究の第三の場所は、シッペール教授のリュ・ド・アレー Rue de Halle の御自宅であった。これはまったく同教授の御厚意によるもので、同教授は筆者に御自宅の門と書齋のキーを与えられ、常時自由に出入するよう勧められ、後述する同教授の秘藏の写本の閲覧を許されたのである。それは同教授が一九六二年台

南より将来された写本群であった。その写本群は中国大陸の常州にあったものが、一括して台南に運ばれたものの一部で、台南府の道会司に所蔵されていたものを、同教授が購入、あるいは寄贈されて、パリに将来されたものである。総計で三百余帙に及ぶもので、同教授の推定では、おおむね清代一八世紀末より一九世紀初頭に至るものと見られ、内容は明代にすでに成立したものと考えられる。写本の書写年代は、最古のもので明末と推定されるものである。これらの写本はおおむね民間の通俗的な道教の經典科儀等に関する学会未発表のきわめて貴重なものと考えられた。筆者はとくに自らの研究志向よりして、これらの写本にいちぢるしい興味を覚え、研究所、国立図書館、高等研究院に通うかたわら、時間がありさえすれば、同教授宅にお伺いし、右の写本の閲覧、抄写に従事した。これらはすべて洋装され、帙に入れられ、整理ナンバーを附して、同教授の書齋に秘蔵されている。それを自由に閲読できて、時にはそれぞれの写本について同教授と意見を交換することもできた。同教授及び御夫人の御厚意には感謝の言葉を知らない。なお、これらの写本中、筆者の特に興味をもったもの數十部は、同教授の手によりコピーされて、筆者に贈られた。これらの内容・形態については、すでに筆者の手もとで整理中で、近い将来公刊する予定である。

同教授はそれらについての研究を公刊することを許されたばかりでなく、御所蔵の全写本の解題目録を、筆者が協力して、日本において公刊することを決意され、現在その見直しもすでについている。これ

らはきわめて貴重な写本ながら、フランスにおいては、そうした資料の公刊を求める声が少なく、中国大陸の道教研究はなおその情勢になく、台湾も、道教研究者の層薄く、寥々たる実情にあり、その要求に答えるのは、日本のみであるとの同教授の判断によるものであった。

従ってこれらの写本の詳細については、筆者の手もとで現在整理中のものを含め、いずれ詳細に解説される予定であるので、ここでは、その一つ一つに触れることは省略する。

ただ目録しえた書名のみを一部記しておくにとどめる。ナンバーはシッペール教授の整理ナンバーである。

086 天師真人傳度奏職文檢全集

085 授錄文檢

084 功德雜記用

096 謝恩—謝恩啓聖科儀

093 道教大普度科儀全集

089 太上三五都功版券職錄請法仙簡

911 正乙嗣漢歴代天師名諱詩文全集

115 道藏（日常の科儀のハンドブックで、いわゆる『道藏』ではない）

114 楽簿

110 雑念

052 ~ 055 金録祈安禳災醮事文檢

091 禳災清醮文檢

以上はほんの一部にすぎないが、民間における道教の教律を知る

のに誠に重要なものと思われた。前述の如く、三百余部のこれらの写本は、いずれ公けにされることになっており、斯学に益する所大であろうと思われる。

筆者が公務を別として、もっぱら私人としての道教研究を楽しむことができたのは、シッペール教授の私宅蔵の、この写本群と、同教授及び令夫人の御好意であったことを附して、謝意を表わしておくこととする。

三、敦煌研究について

滯仏のもう一つの大きな目的であった敦煌研究の、当時の情況について一瞥しておく。（この点については、現在他の場所で公表することになっているので、要点のみ記しておくことにとどめる。）筆者の滯仏中の敦煌研究の調査については、その中心は、前述アジア研究所の敦煌研究室 CNRS, ERA. 438 であった。さらに云うまでもなく、Bibliothèque Nationale があるが、これについては、大方の訪仏者はすべて承知のことと思うので、若干の注意すべき点のみを摘記するにとどめる。

研究所の敦煌研究室は、前記道教研究室と同一フロアにある。筆者がフランス研究員各位と懇談会等を行ったのもその部屋であった。（ただし、公開講演会は、同研究所の一階の小講堂であった）

この研究班が行っている作業は、いうまでもなく、ペリオ将来国

立図書館所蔵写本目録の編纂である。

この目録は周知の如く、その第一巻が、“Catalogue de manuscrits chinois de T'ouen-houang” (Bibliothèque Nationale, 1970) として、最初に世に問われた。ジャック・ジュルネ博士 (Jacques Gernet), Wu Chiyu 呉其昱博士を主編とし、北京の故王重民教授、ビブリオテク・ナンオナルのマリー・ローズ・セギ女史 (M. R. Séguy), エレーヌ・ヴェチ女史 (H. Vetch), 故マリー・ロバール・ギニヤール夫人 (M. R. Guignard) 等多くの研究者が協力して完成したものであった。これが世界の敦煌研究者の長く待望していたペリオ写本の目録の第一号であり、ペリオ漢文写本の最初のナンバーたる二〇〇一号からはじまり、二五〇〇号に至るものの全貌を明らかにしたものである。これらについては、秋山光和、池田温等各会員の詳細な紹介書評があるし、筆者も曾て一文を公けにしたことがあるので多くは触れない。

第一巻刊行後の大きな変化は、次の通りである。

第一巻には、五〇〇点ずつの写本を一冊にまとめ、全一〇巻として刊行する予定とされていたが、二五〇一号から三〇〇〇号に至る第二巻はまだ行刊されず、三〇〇一号から三五〇〇号に至る第三巻がすでに刊行されているという変則的な事態である。しかも同研究室における見聞によれば、第四冊はすでに校正が進行中で、第五冊の原稿も執筆中なのである。

筆者の所属する大学においても、このペリオの紙焼き写真は、東洋

文庫のマイクロフィルムによって、逐次整備中であるが、二五〇一号より三〇〇〇号までの目録が出ていないため、きわめて研究員、学生の利用に不便を来たしている。その実状を率直に語った所、第二冊目はこの ERA. 438 の研究班とは別に、ビブリオテク・ナンオナルの、前述セギ女史の手で、一応の完成を見たが、同女史が退休されたので、目下ヴェチ女史の手で編纂がすすめられているとのことであった。いずれ日ならずして第二冊も公けにされるとのことであったので、その日の来るのが、一日も早いことを期待しておきたい。

第二には、研究室のメンバーの異動である。

従来より ERA 438 は、前述ミシェル・スワミエ教授が主幹となっていたが、目録第一冊は、同教授の主編ではなかった。しかしながら、第三冊は、Avant-Propos は同教授の手になり、スワミエ教授のリードのもとに、完成されたものである。参加した研究者のメンバーは左の通りである。

ジャン・ピエール・ドレージュ (J. P. Drège), 左景権、ダニエル・エリアスベルグ (D. Eliasberg), Hou Ching-lang, ホール・マニヤン (Paul Magnin), マリー・パスカル・モニエ (Marie-Pascale Monnier), マリー・クレエル・キクメール (Marie Claire Quigemelle), リシャル・シュネデル (Richard Schneider), エリック・トロンベール (Eric Trombert) 及び呉其昱博士等である。筆者が研究所でお会いできたのは、必ずしもこの全員ではなく、また前記郭麗英女史や京戸慈光氏も加わっておられたので、果して ERA. 438 の正規の研究

員が何名なのか詳らかでない。しかしいずれにせよ、スワミエ教授の指導の下に、これらの人々が、ペリオ目録の作業を中心に活躍しておられるわけである。もともとスワミエ教授のお話しによれば、最近、同目録の主筆は、スワミエ教授がこれを辞され、ポール・マニャン氏が代わられたということであったが、ERA. 438 は、筆者の滞仏中に限って言えば、依然として、スワミエ教授の指導下にあるものと考えられた。

第三には、この目録の刊行主体の変更である。第一冊目は、ビブリオテク・ナシオナルの東洋写本部の刊行となっていたが、この第三冊目、一九八三年刊は、シンガー・ポリニャックの基金による刊行である。もともと第一冊においても、この大実業家の基金の授助があったようであるが、第三冊に関していえば、ビブリオテク・ナシオナルは刊行主体ではない。現在東洋写本部主任のコーエン夫人はスワミエ教授の高弟の由で、作業の連絡はきわめてなめらかなようであるが、今後の第四冊、第五冊の刊行もひきつづき第三冊と同じ形態をとっていくものと思われた。

第四には、編纂におけるコンピュータの導入等、その方法がいちじろしく活性化し、かつスピーディに、また正確になっていることである。もちろん基礎作業としての、図書館における写本調査は厳密に実行されている。現に筆者が図書館にいる中も、エリアスベルグ嬢、呉其昱博士等とはしばしば同写本部でお目にかかったし、その作業も目撃したが、研究所における作業の機械化は、かなり急速に進んでいる。

それは、紙質、墨色等の科学的調査にもとり入れられ、主として前記ドレージュ氏の光線利用の調査方法等による写本真偽の鑑定、クロノロジイの確定等にあらわれている。ドレージュ氏は、そうした方法によって、台北中央図書館蔵の敦煌文献（マイクロ・フィルムは東洋文庫にあり、全巻子は、台湾石門出版公司『敦煌卷子』に収められている）の再調査を行なわれた由である。本邦においてもかかる方法は、藤枝晃博士の研究グループの手によって行なわれている由であるが、フランスのかかる方法の急速な進展は、今後に新しい展望をひらくものと考えられる。

第五には、同研究グループの世界の敦煌研究者、研究機関との交流がすでに急速にすすんでいることである。一〇年以前筆者が訪仏した折には、レニングラード所蔵の敦煌文献はほとんど同研究所にそなえられていなかったが、今日では同研究グループは、レニングラードのメンシコフ (J. H. Mensikov) 教授のもとを訪問されて、直接交流の道もひらかれているし、仏、蘇両機関の交換により、ソヴィエトの東洋研究所々蔵の全写本のフィルムは、フランスのペリオ文献のフィルムと交換に、すべてパリにそなえられている。本邦におけるレニングラード文献がな個人将来の寄贈や紙焼きが東洋文庫に若干収められているにとどまっているに比し、国家規模で行なわれる事業が、欧州各国で進行していることを思うと焦慮の念に堪えぬものを、感ぜざるを得なかったのである。

またフランス研究班と中国との交流も、特筆しておくべきことであ

らう。一九八二年、スワミニ教授をはじめとする同研究班は敦煌に赴かれた。これはペリオ訪煌以来、フランス東洋学者が訪れた始めてのことであろう。

ただこの訪煌は、必ずしもフランス側の満足を得るものではなかったようである。敦煌文物研究所には、すでに学界周知の通り、第十七号窟発見後、蒐集された若干の写本が収蔵されている。(その目録は『文物資料叢刊』第一号—文物出版社・一九七七年—に、「敦煌文物研究所所蔵敦煌遺書目録—敦煌文物研究所資料室編—として、三六七点挙げられている。) フランス敦煌研究班は、この敦煌文物研究所々蔵写本マイクロフィルムの入手を望んだが、果し得なかったようで、敦煌滞在も一兩日にすぎず、徹底した研究調査は不可能だったとのことである。まだフランス・中国両国の協同研究、全面的研究交換の域には達していない旨の発言があった。しかしながら、中国・フランスの敦煌研究の交流が断絶しているか、あるいは停滞していると思うのはあやまりである。若干、形式的ではあっても、前述の如く、フランス側の訪中があったし、また一九八三年には、敦煌文物研究所のスタッフのパリ訪問があり、法中(フランス・中国)敦煌学会が、パリにおいて開催されている。一九八三年二月二十一日、二十二日、二十三日パリにおいてひらかれた Colloque franco-chinois がされ、やはりノンガー・ポリニャックの基金で行われていた。

そのロケットの成果は一九八四年十二月に「Les Peintures Murales et les Manuscrits de Dunhuang」として刊行された。筆者が

寄ゆられたが、その内容は左の通りである。

- Michel Soympié: Introduction
Rolf A. Stein: Allocution
(スタン博士がこのロケットの最高責任者によること)
- R. A. Stein: Quelques découvertes récentes dans les manuscrits tibétains
- Li Young-ning (李永寧): Collation d'un manuscrit fragmentaire du Yunnan-Jun (運命論)
- M. Soympié: Quelques inscriptions de peintures murales recueillies dans les manuscrits de Dunhuang
- P. Colombet: Technique de la peinture murale de Dunhuang et protection du site et des oeuvres
- Hou Ching-lang: La cérémonie du Ying-cha-lo et les estampes de mille Buddha
- D. Eliasberg: Quelques aspects de l'exorcisme no à Touen-houang
- J. P. Drège: Elements méthodologiques pour l'étude des documents de Dunhuang
- H. Veitch: Lin Sabe (劉善才); Traditions et iconographie
- J. Hamilton: Les manuscrits Ouigours de Touen-houang: Généralités
- P. Bernard: Aikhanoun et la diffusion de l'hellénisme en Asie centrale et dans l'Inde de nord-ouest

Wu Chi-yu (呉其蔚): Les manuscrits sanskrits de Touen-houang conservés à la Bibliothèque Nationale de Paris

P. Magnin: Un exemple de Catechèse Bouddhique

Kuo Li-ying (郭麗英): Un texte ancien de vœu et de confession:

P. 2189, le vœu de la capitale de l'est

Carole Morgan: L'école des cinq noms dans les manuscrits de

Dunhuang

Shi Ping-ting (施萍亭): Description générale de manuscrits conservés à Dunhuang

Shi Weixiang (史韋湘): Autour de l'occupation de Shazhou (沙州) par les Tibétains

Duan Wenjie (段文杰): Recherches sur le style et le contenu iconographiques de la grotte 249 de Mogao (莫高窟)

以上序及び論文一四七頁、写真図版五四葉の美装本で、やはりミンガー・ポリニャック基金による刊行である。

このようにフランス研究班が敦煌文物研究所と直接交流し、国際ロケットを開催するに至ったことは、やはり注目すべき動向で、今後における各国間の交流を活性化する大きな刺激剤となるであらうことは、当然予測される。

以上述べた如く、ヘリオ文献目録の作業を中心とした ERA. 438 の活動は、数年前とは、若干の変化を見せながらも、着実につづけられている。もちろん全巻が完結するのはなお多大の歳月を要するであらう。

うが、若い研究者も着実に養成されているし、各国との交流も活発化しているし、次第にその内容も充実したものとなっていくであらう。

なほ、目録はなれて、ERA. 438 の若干の活動について附記しておく。

スワミエ教授を中心とするグループは、右の目録作業を中心としながら、なほメンバーそれぞれの敦煌に関する研究業績を公刊しつつある。

Contributions aux études de Touen-houang がそれである。この学期は、Publications de l'École Française d'Extrême-orient の特別モンツランとして刊行されており、今回の訪仏の折には、その第三冊がその年（一九八四年）に刊行されていた。主編はスワミエ教授で、今、その目次のみを示せば、左の通りである。

Introduction aux études de Turlan: Présentation générale des travaux des spécialistes chinois, par MU Shunying et WANG Binghua1— 21

Les noms du royaume de Khotan, par ZHANG Guangda et RONG Xinjiang.....23— 46

Sur la chronologie khotanaise au IX^e-X^e siècle, par James HAMILTON47— 53

Quatre manuscrits de Touen-houang conservés à la Bibliothèque Nationale de Paris, par WU Chi-yu55— 75

Quelques représentations de statues miraculeuses dans les grottes

de Touen-houang, par Michel SOYMIÉ.....	77—102
Une étude de la date et de la nature du manuscrit wei 位 79 de la Bibliothèque Nationale de Pékin, par TANG Geng'ou	103—142
Le "Yœu de la capitale de l'Est" de l'empereur Wu des Liang, par JAO Tsong-yi	143—154
En marge de l'œuvre de Wang le Zélateur: deux manuscrits (P. 3724 et S. 6032) du volume sans titre, par Hélène VETCH	155—193
Les accordéons de Dunhuang, par Jean-Pierre DREGÉ	195—204
La cérémonie du Rin-cha-fo d'après les manuscrits de Touen-houang, par HOU Ching-lang.....	205—235
Quelques aspects du grand exorcisme no à Touen-houang, par Danielle ELIASBERG	237—253
L'École des Cinq Noms dans les manuscrits de Touen-houang, par Carole MORGAN	255—261
Déplacement de l'expérience noïrique selon trois courts traités de Madhymika chinois, par Paul MAGNIN	263—303
Le Sutra merveilleux du Ling-pao Suprême, traitant de Lao-tseu qui convertit les barbares (le manuscrit S. 2081), par Anna SEIDEL.....	305—352

一巻、二巻については、夙に本邦研究者の利用する所となっているから、その目次を示すことは避ける。本号は *École Française d'Extrême-orient* の刊行に依り、その学報の通算ナンバーは CXXXV である。この学報は、現在の ERA. 438 の研究志向や水準を示すものとして、今後とも注目していく必要があるであろう。

なおスワミエ教授は、日本所蔵の敦煌文献―すなわち龍谷大学・書道博物館・藤井有隣館等々の全文献のマイクロ化と、その完璧な目録の公刊を切望しておられたが、同様の希望は、レニングラードのメンシコフ教授、台湾の黄永武教授（『敦煌宝蔵』主編者）からも、筆者は聞かされたことがある。「在日本敦煌文献」のマイクロ化と、目録の公刊は、今後日本の敦煌研究者の一つの課題として、世界の斯学界から求められることになるかも知れない。

スワミエ教授は ERA. 438 の責任者たる地位をマニャン氏に譲ったとについても、筆者の滞仏中は、なお実質的な主宰者であり、その研究活動は、いさなかも減じていない。高等研究院の助教としては、一九八四年より、一九八五年までの講義として、「敦煌の写本と絵画」Manuscripts et peintures de Dunhuang を開講される由であった。筆者の滞仏中は、また開講していなかったもので、そのイントロダクションを聴講することはできなかったが、同教授の語られた所にすれば、この講義は、絹に書いた絵画ではなく、紙の写巻に書かれた絵画を中心として講ぜられる予定で、とくに白描、白画が中心となるであろうとのことであった。既刊の故ポール・ドミエヴィル (P. Demiéville) 博

士、饒宗頤博士の 'Dunhuang Paints' (敦煌白画・正式には Peintures monochromes de Dunhuang — Dunhuang Paints —) Publications de l'École Française d'Extrême-orient, Mémoires archéologiques, XIII で、右両博士の他に Pierre Ryckmans 氏が参加しておられる。

一九七八年刊)と如何にからみ合うか、誠に興味ある所であった。幸いなことに、この講義は高等研究院のアニエールに出る他、日本の講談社インターナショナルの『西域美術』の「ギメ美術館」(ロンドン大英博物館の部は既刊)の部に、その全文が収録され、いずれ公刊されるとのことなので、遠からず本邦研究者の目にも触れることとなるであろう。

スワミニ教授の近況のみでなく、古くからの知己である呉其昱博士、ダニエル・エリアスベルグ嬢の研究等についても、そのお聞きした所を伝えたかったが紙幅の関係ですべて省略する。

またコレージュ・ド・フランスの日本学の担当者で、これまた古くより厚知のベルナル・フランク (M. B. Frank) 博士からは、研究所や御自宅で、種々御教示を蒙り、とくに日本及びヨーロッパの多神教の研究については、きわめて示唆を受けることが多かったがこれも本稿標題とちがったタイトルの下に紹介すべきことが多いので略に従うこととする。フランク教授の御諒承をお願いしたい。

四、おわりに

以上きわめて雑然と昨秋滞仏の折の見聞を記して来た。冒頭に記した如く、これは一九八四年秋の約一ヶ月にすぎぬ滞仏の限られたインフォメーションであつて、これをフランス東洋学の近況と称すつもりは毛頭ない。

筆者の限られた知識と経験によるものなので、会員諸賢の御参考の一端ともなりえぬかも知れない。ただ年々の招聘者が過去にもあったし、今後もあることを思い、筆者の狭い視野からの報告も、あるいは、些少の補助の役割りを果たすかと思われたので、編集部のお勧めに応じた次第である。

今後、この分野で訪仏される方々の、より周到な報告を期待する。フランス及び日本の関係者各位の、筆者滞仏に際しての御厚志に改めて感謝の意を表したい。

— 附記 — ビブリオテク・ナンオナルについて触れる余地はなくなったが、一言だけ記しておく。同館東洋写本部でのペリオ写本の閲覧は、筆者の過去兩三次における訪仏の折は、比較的自由であったが、現在ではいちぢるしく厳しくなっている。同館入構証も写真を附したものを必要とするし、写本部では、一般には、写本のコピーを見せる由で、原巻はなかなか閲覧させない。筆者はスワミニ教授の紹介で、同館東

洋写本部コーニン夫人の許可により、すべて原巻を閲読できたが、「降魔変文」画巻本の如きは特別扱いで、他の写本と区別して貸出された。エリアスベルグ嬢の話によれば、近年写本を汚損させたり、甚しきに至っては、写本の一部を切りとる（ペリオ写本ではない）ような不徳義漢がいたため、かかる嚴重な措置がとられたとのことであった。

○ 会員総会報告

『学会通信』前号に予告のごとく、昭和六〇年度総会は六月七日（金）午後、京都大学近辺の関西日仏学館内にて挙行された。東京方面からは榎会長、福井主幹をはじめ七氏の御来駕を忝くし、出席会員は計二二名を数えたほか、会員外からも十名余のオブザーバー参加が見られた。

総会に先立ち、主として議事に関する打合せのため、評議員会を行なう（三時半より、二階サロンにて）。出席者は羽田、榎、大地原、デュルト、福井、興膳、坂出、御牧、浜田、弥永、川崎の各評議員。総会議事と座談会とは、中絶なく（四時一〇分より二時間）一階稲畑ホールで開催、御牧克己幹事が総括司会に当った。冒頭ミシェル・ウイエ館長に対し、司会者から謝意表明があったほか、会の概要は左記のごとくである。

一、開会の辞

榎一雄 会長

一、総会議事（議長 興膳宏 評議員）

A 審議事項

- 1 昭和六〇年度予算案（川崎ミチコ会計幹事より、五九年度決算報告とともに六〇年度予算案を説明、承認。別表参照のこと。）
 - 2 「関西部会」名称の新設（地域的に限られた他団体との共催行事に対し、該部会名称の使用が許されたい旨を、大地原評議員より要請、承認。）
 - 3 学会役員の補充選出（神田喜一郎、川勝義雄、両評議員の逝去と浜田正美幹事の勤務地変更とに伴ない、関西在住の評議員・幹事として森安孝夫氏を羽田名誉会長より推挙、承認。）
 - 4 学会事務局員への出張費補助（福井主幹より弥永信美、川崎ミチコ両氏の実情を説明、承認。）
- #### B 報告事項（福井文雅 主幹）
- 1 学会事務局「書記」の新設（弥永信美氏が就任。）
 - 2 『学会通信』第四号の編集案（詳細略、とくに書評・新刊紹介欄の企画が報告された。）
 - 3 第四回日仏学術シンポジウム開催準備の近況（詳細略。）
（なお、この間、弥永書記より『会員名簿』中の誤植指摘につき依頼あり、また出席者中より、2に触れて、会員紹介的な記事の考慮を促す声があった。）

日仏東洋学会昭和59年度（昭和59年4月1日～昭和60年3月31日）会計決算報告

収 入	
普通会員会費	234,000
利 息	120
合 計	234,120
支 出	
印刷費	90,000
①『学会通信』第2号製作費	20,000
②『学会通信』第3号製作費	20,000
③学会員名簿製作費	50,000
通信費	23,210
①『学会通信』第2号発送費	6,210
②『学会通信』第3号発送費・学会員名簿発送費	17,000
会議費	1,600
消耗品費	20,830
雑 費	44,000
発会準備のための支出（昭和58年度分）	5,870
①通信費	3,470
②消耗品費	2,400
合 計	185,510

総収入 - 総支出 = 234,120 - 185,510 = 48,610

昭和59年度残金48,610円は、昭和60年度への繰越金とする。

上記のごとく相違ありません。

昭和60年6月4日

日仏東洋学会会計監事 池田 温

日仏東洋学会会計監事 原 實

日仏東洋学会昭和60年度（昭和60年4月1日～昭和61年3月31日）会計予算

収 入	
普通会員会費	210,000
利 息（昭和60年4月1日入金）	1,353
繰 越 金	48,610
合 計	259,963
支 出	
印刷費	70,000
①『学会通信』第4号製作費	30,000
②『学会通信』第5号製作費	30,000
③諸案内ハガキ印刷費	10,000
通信費	
①『学会通信』第4号発送費	8,000
②『学会通信』第5号発送費	8,000
③特別講演会開催通知用ハガキ代	8,000
④上記以外の通信費	15,000
会議費	15,000
消耗品費	20,000
支払報酬費	6,000
雑 費	61,353
予備費	48,610
合 計	259,983

一、座談会「東洋学各分野における戦後日仏交流の歩み」

(進行担当、大地原豊 評議員。時間的制約から今回は、羽田名譽会長および京大・東南ア研・所長、石井米雄教授からの要旨左のごとき談話を主とするに止まった。)

1 羽田明氏談話——一九三六年から二年余のフランス留学は、ベル・ニボックの落日と重なる人民戦線期から、ミュンヘン会議そしてチエコ解体へと急転直下の時勢ではあったが、同じころ滞仏の宮崎市定博士がオスマン・トルコ史に向われるのと云わば分業的に、トルキスタン史料を指して所要の基礎を固めるに努めた。戦後の日本で、護雅夫氏に発する東大の系列も加わってトルコ学の進展が著しい間、往年フランスに持った知己が若き後進の留学を実現する上で大いに役立ち、その結果はトルコ学のみならず、近世イラン研究、さらには先史考古学においてまで、気鋭の専門家が輩出するに到った。顧みて深く同慶に耐えない。——この談話に関連して山中一郎氏はV・エリセニフ(現ギメ博物館)館長を介して先石器考古学の門に進んだ経緯を、浜田正美、森安孝夫の両氏はハミルトン博士をめぐるトルコ学の学界消息を、またオーバン教授に学んだ羽田正氏は、他日ベルシア世界に對する東からの視野を拓きたい旨の抱負を、いずれも活発に開陳された。

2 石井米雄氏談話——戦前ハノイの極東学院でセデス院長と相識られた山本達郎博士の門下からは、戦後に金山好男氏が現れてパリに留学、セデス博士に師事されたのであるが、不幸にも一九六二年、同

氏の客死によって以後の数年間、インド・シナ学における日仏交流に空白が生じた。しかしながら一九六八年パリにおいて石井が、タイ古代法典に関しランガ博士の個人的指導に接して以来、木村哲三郎(アジ研)、石沢良昭(上智大)、新谷忠彦(AA研)、坪井善明(北大)、その他の諸氏が続々と相次ぎ、ベトナム、クメール、タイの各研究分野で、コンドミナス、ジャック、オードリクールの諸家との間に密接な関係が結ばれて来ている。しかも、石井自身の場合がそうであるように、この新しい日仏交流の場となっているのは、戦後の「東南アジア地域研究」よりも遙かに勝って、極東学院に本来的な「インド・シナ学」の伝統であることを強調したい。

一、閉会の辞

羽田明 名譽会長

総会終了後、出席者一同は至近距離(京大・人文研を挟んで隣り)にある日伊文化センターに赴き、その四階に昨年開設されたイタリア東方学研究所、とくに同所に保管される故ラモット博士蔵書を見学した。案内の労をとられた上に、この研究所開設の沿革を、『法宝義林』および極東学院日本支部との関連の下に説明されたユベール・デュルト、アントニーノ・フォルテ両氏に、厚く御礼申上げる。最後に、日仏学館へ戻って(七時からの一時間)、四階館長宿舍でのカクテルに歓談がはずんだ。ミシエル・ヴィエ館長は、東洋言語文化学院(往年の東洋語学校、現在のところパリ第三大学の付設機関)にあって日本学科の教授、二十年前には日仏会館研究員として『日本史辞典』の企

画に携わった方である。同館長、そして学館の関係者各位より賜わった御好意のすべてに、重ねて熱烈な謝意を表明したい。

(文責 大地原 豊)

○ フランス東洋学関係書・新刊紹介

Cahiers d'Extrême-Asie. Revue de l'Ecole Française d'Extrême-Orient, Section de Kyoto, No. 1, 1985 (年刊)。

副題にもあるように、これはフランス極東学院・京都支部の機関誌ともいうべき、新たな学術雑誌です。この「極東学院・京都支部」というのは、御存知のように京都の相国寺内の「法宝叢林研究所」のことです。ここでは、二十年来 H. Durt (ユベール・デュルト) 氏をはじめとして、A. Seidel (アンナ・ザイデル)、A. Forte (アントニーノ・フォルテ)、R. Duquenne (ロベール・デュケニス)——いずれも本学会会員——の諸氏によって、フランス語による仏教用語辞典『法宝叢林』の編纂事業が進められていますが、そればかりでなく仏教学・東洋学を中心とした広い文化学術的な国際交流活動が行なわれています。訪日した(フランスに限らず欧米の)高名な学者の多くは、一度はここに足を運んでいるいろいろな情報を得、また各国の研究の近況について語っていきますし、また京都に滞在する若い留学生たちも、この施設や図書を使ったり、また学問上のアドヴァイスを得たりすることも少なくありません。こうした高度な学術交流活動の一環とし

て発刊されたのが、この新しい雑誌です。編集委員会 (Comité de rédaction) に名を連ねているのは、『法宝叢林』編纂のメンバーの他に、おもにフランスで活躍している新進の研究者で、「敦煌研究班」(équipe de recherche sur les manuscrits de Touen-houang) や「道蔵研究プロジェクト」(Project Tao-tsang) に属している人が中心になっています。J.-P. Dreye (ドレージヤ)、F. Girard (シラル)、M. Kalinowski (カリノフスキ)、J. Lagerway (ラガワエ)、I. Robinet (ロビネ) の諸氏の名前は、本学会会員の方々にもなじみ深い方が多いのではないのでしょうか。内容は、題名の Extrême-Asie が示すとおり、インド以东、特に中国以东の諸文化の研究が中心となりますが、時代的にもテーマ的にも極めて広く、柔軟なパースペクティブがとられているようです。編集者は、その「緒言」(“A nos lecteurs”) で、「本誌は新たな研究紀要雑誌を目指すものではなく、むしろ学術研究に必要な各種の情報を速かに提供する “Newsletter” の役割を果すことを目的としたい」と書いています。フランスばかりでなく、広く欧米の東洋学と「東洋の東洋学」の一つのメッカともいえるべき京都で得られる情報との間の橋渡しをすることが、本誌の使命であるとの認識でしょう。とはいっても、この創刊号を飾る各論文は、長さこそ特に長大なものはないものの、それぞれ優れた研究論文であるといえるでしょう。

創刊号の目次は次のとおりです。

- ① Max Kallenberg La légende de la ville immergée en Chine
- ② Huber Dart Clichés canoniques bouddhiques dans les légendes sur les débuts du bouddhisme au Japon
- ③ Frits Staal Substitutions de paradigmes et religions d'Asie
- ④ Allan G. Grapard Voltaire and East Asia——
A Few Reflections on the Nature of Humanism
- ⑤ カルタンマルク氏による中国における「水没都市」の伝説についての研究。これは同氏が訪日された際に行なわれた講演の原稿に基づいたものです。同様の訪日学者による講演原稿の刊行は今後も予定されています。
- ⑥ デュルト氏による、日本における仏教伝来についての歴史記述の比較文学的の研究。これは大阪大学におけるセミナーの内容の記録で、仏教伝来に関する『日本書記』の記述や各種の聖徳太子伝の中に見られる仏教文学に由来するテーマを扱ったものです。
- ⑦ カリフォルニア大学バークレー校教授、フリッツ・スタール氏による(東)アジアにおける「宗教」と「パラダイム転換」についての方法論的研究。スタール氏の業績は最近『神秘主義の探究——方

法論的考察』(秦本融・江島恵教・宮本啓一共訳、法政大学出版局、一九八五年)が邦訳されて注目されていますが、ここでもクーンによる「パラダイム論」というアクチュアルな問題をとりあげて、東アジアの宗教史学について根本的な考察がなされています。——これは、ハワイ大学で一九八四年一月に催された“Paradigm Shifts in Buddhism and Christianity”をテーマにした学会で発表された論文の仏訳(デュルト氏による)です。

④ グラバール氏による中国や日本の文化史に見られる「人間主義」の性格についての考察。ヴォルテールの(特に彼の東アジアについて書いた著作に顕著な)「人間主義」との類似が興味深く論じられています。

③はアメリカで教鞭をとるオランダ学者の英文の論文の仏訳、④はフランス人学者がアメリカのコーネル大学で行なった英語の講演で、このへんにもこの雑誌の国際的性格が強く現われています。また、他の場所でもなんらかの形で発表されたもの(たとえば講演など)をはじめて印刷の形で読者に提供するというのも、本誌の Newsletter 的性格のおかげでできることです。

これらの論文の他に、「東洋における東洋学」の研究の現状や成果を欧米の読者に伝えることも、本誌の重要な役目です。創刊号でそれに関係するのは、

研究現状の報告——

⑤ Livia Knaul The Habit of Perfection——

A Summary of Fukunaga Mitsuji's studies
on the *Chuang tzu* Tradition

福永光司教授の『莊子』研究の成果についての詳細な報告。

書評——

⑥ Kathryn Tsai

Biographies of Buddhist Nuns——

Review Article of Li Jung-hsi tr.,

Biographies of Buddhist Nuns,

Pao-chang's Pi-chiu-ni-chuan.

Li Jung-hsi 氏による『比丘尼伝』(註唱撰) 大正蔵 L. No 2063)

の英訳の書評。

研究文献紹介——

⑦ A.S. "Schafar Sinological Papers"

⑧ H.D. and A.S. Recent Japanese Publications on Chinese

and Japanese Religions

⑦ カリフォルニア大学バークレー校のシェフナー教授の個人研究誌

Schafar Sinological Papers についての情報。

⑧ 中国・日本の宗教についての日本の最近の研究書文献紹介。

輝かしき歴史をめぐり *Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême-*

Orient に、この新鮮で実用的、かつ高度な内容の「姉妹誌」が生ま

れたことを喜び、次号以下のお楽しみですの充実・発展を期待します。編

集スタッフ、特にデュルト氏とザイデル氏の多大な御努力に敬意を表

したいと思います。——なお、今年の「極東学院・京都支部」の年賀

状によれば、本誌は寄稿を大いに歓迎することです(原稿は仏文
または英文でお願いするということです)。

すでに紙数が尽きましたが、次の二冊はぜひ御紹介したいと思いま
す。

Toru Yagi [八木 徹] *Le Mahabhasya ad Patani* 6. 4. 1-19,

Collège de France, Institut de Civilisation indienne, Paris, 1984

(Publications de l'Institut de Civilisation indienne, fasc. 50),

Diffusion, E. de Boccard.

本学会会員の八木徹氏のパリ大学学位論文 (doctorat de troisième

cycle) です。「パーニニ学」についての新たな成果を見事な仏文で論

述する論文で、日仏会館図書室に著者から一冊、寄贈されています。

Simone Maucclair [シモーヌ・モークナール] *Du conte au roman.*

Un Cendrillon japonais du X^e siècle: l'Ochikubo-monogatari,

Collège de France, Bibliothèque des Hautes Etudes Japonaises,

Paris, Maisonneuve et Larose, 1984.

『落窪物語』を歴史民俗学的・社会学的観点から分析した労作で、

Ecole des Hautes Etudes en sciences sociales の学位論文 (doctorat

de troisième cycle)。今年の渋沢・クローデル賞の候補作品で、惜し

くも次点となりましたが、その学問的価値はB・フランク氏(元日仏

会館フランス学長、コレージュ・ド・フランス教授)によって高く評

価されています。

(福永信美記)

掲載の項目とその執筆者名とを左に示せば――

- | | |
|----------|-----------------|
| ダ(茶、琴、陀) | H・デュルト |
| 茶 毘 | A・ザイデル |
| 大 | R・デュケンヌ |
| 大安慰 | 御牧克己 |
| 大煩惱地法 | A・パロー |
| 大佛頂 | H・デュルト |
| 大不善地法 | A・パロー |
| 大権修利菩薩 | H・デュルト |
| 大元帥(明王) | R・デュケンヌ |
| 醍醐 | A・ザイデル |
| 大威徳明王 | R・デュケンヌ |
| 大士 | A・ザイデル |
| 大寺 | (インド)
H・デュルト |
| | (中国)
A・フォルテ |
| | (日本)
H・デュルト |
| 大地法 | A・パロー |
| 大自在天 | 弥永信美 |
- なお、弥永信美氏は、『現代思想』誌上に、一九八五年一月号以来、「幻想の東洋」という欧米人の東洋観を詳細にあとづけた論考を連載中である。(福井文雅記)

○ 日仏学術シンポジウムについて

今秋パリで開かれるその第四回については、これまでたびたび報告してきましたが、一九八二年に東京で開かれました第三回については未だでありましたので、ここでいくらか御報告しておきます。

その当時は、日仏東洋学会はまだ発足していませんでした。そこで、*Etudes Japonaises* (日本研究) という部門がたてられ、「十九世紀後半のフランスと日本」がこの部門のテーマであり、日本側責任者には秋山光和教授が当りました。この「日本研究」部門への参加者氏名は左の通りでした。(身分は当時のまま)

- | | |
|--------------------|-------------------|
| 秋山 光和 (学習院大学教授) | 穴沢 一夫 (筑波大学教授) |
| 阿部 信雄 (ブリジストン美術館) | 阿部 良雄 (東京大学助教授) |
| 池上 忠治 (神戸大学教授) | 井田 進也 (東京都立大学助教授) |
| 大久保泰甫 (名古屋大学教授) | 大島 清次 (栃木県立美術館長) |
| 大森 達次 (ブリジストン美術館) | 岡山 隆 (早稲田大学教授) |
| 尾本 圭子 (ギメ博物館) | 加藤 周一 (上智大学教授) |
| 嘉門 安雄 (ブリジストン美術館長) | 木村 三郎 (日本大学講師) |
| 木村尚三郎 (東京大学教授) | 小林 善彦 (東京大学教授) |
| 坂本 満 (お茶の水女子大学教授) | 清水 勲 (漫画研究家) |
| 霜 弘太郎 (筑波大学教授) | 高階 秀爾 (東京大学教授) |

高橋邦太郎 (日本仏学史学会会長) 千葉 成夫 (東京国立近代美術館)
 富田 仁 (日本大学教授) 二宮 宏之 (東京外国語大学教授)
 芳賀 徹 (東京大学教授) 平川 祐弘 (東京大学教授)
 福井 文雅 (早稲田大学教授) 舛添 要一 (東京大学助教授)
 馬淵 明子 (東京大学助手) 武者小路公秀 (国連大学副学長)
 森田紫磯子 (桐朋学園大学講師) 山田智三郎 (ジャポネズリー研究会会長)
 渡辺 守章 (東京大学教授)

これに先立つ第一回日本学会議(一九七九年一〇月、パリ)には、日本からは次の十人が参加し、シンポジウムの司会あるいは発表の役をそれぞれ勤めました。責任者は、秋山光和教授。

秋山光和 (学習院大) 阿部良雄 (東大)
 福井文雅 (早大) 芳賀 徹 (東大)
 松原秀一 (慶大) 岡山 隆 (早大)
 大久保泰甫 (名古屋大) 高階秀爾 (東大)
 吉田敦彦 (成蹊大) 渡辺守章 (東大)

この他、現地参加者として、藤森文吉、加藤周一、武者小路公秀、丹羽明等の各氏も各シンポジウムの責任者になりました。

「日本研究」部門について詳しいことは、

Les Etudes japonaises en France. Colloque, octobre 1979, Paris
 ならびに

「ジャポニスムの時代——十九世紀後半の日本とフランス——」

(*L'Age du Japonisme. La France et le Japon dans la deuxième moitié du XIX^e siècle*) 一九八三年、日仏美術学会をこらんとすい(両書とも日仏会館図書室で参観できます)。

学 会 活 動

○ 一九八五年三月二日 日仏会館にて

国立科学研究センター(CNRS) 研究員ジャン・クロード・マルツロフ Jean-Claude Marzloff 氏講演

「マッテオ・リッチ——宗教・科学・技術」(“Matteo Ricci: religion, science et technique”)

を日仏理工科会と共催(主催・日仏会館)。

○ 一九八五年五月二日 京都大学人文科学研究所会議室にて

パリ大学教授イーヴ・エルヴェット Yves Hervouet 氏をかわむ座談会

「フランスにおける中国学の教育・研究の組織と最近の研究動向」
 (“Organisation des études chinoises en France et travaux de recherches récents”)

(通訳ロベール・デュケンヌ Robert Duquenne 氏) を開催。

○ 学会費の納入方法について

年会費は三千円です。振替口座番号は、東京一―一三四五八四で、宛先は、「日仏東洋学会」です。

前号に同封しました振替用紙などを利用して、早目にお送り下さいますよう、未納の方々に改めてお願い申します。

なお、新入会員の方々のために改めて申し上げますならば、「日仏東洋学会」の会員になることと、「日仏会館」の会員になることとは、まったく別物です。どうか混同なさいませぬように……。

日仏会館の会員になりますと、日仏会館の諸行事の通知その他の便宜を受けることができます。日仏東洋学会の会員は、入会金(年会費とは別)を免除されますので、会館への入会希望者は、日仏東洋学会事務局あてに葉書で御連絡下さい。申込書をお届けします。

会 員 消 息

○ 第十三期日本学術会議会員に、次の四氏が選出された。

平川 彰 楠山春樹 桜井清彦 (以上、第一部人文学系)

滋賀秀三 (第二部法学系)

今回から、学術会議の会員選出方式は、選挙制から学会推薦・首相任命制に移した。新会員は、七月下旬から三年間の任期を務める。

会 員 名 簿 訂 正

○羽田 明 住所 京都市北区大宮南山尻町11

↓京都市北区大宮南田尻町11

電話 ○七五―四九―三七〇〇

↓○七五―四九―一三七〇〇

○大地原 豊 電話 ○七五―八六―二二三七七

↓○七五―九六―二二三七七

以上の方々の住所が、『通信』第三号ともにお送りした名簿で間違っており、たいへん御迷惑をおかけいたしました。謹んでお詫びし、訂正いたします。

住 所 変 更

○濱田正美 住所 東京都八王子市栲田町七二〇―一〇三

↓東京都八王子市寺田町四三二―一七一―一

○羽田 正 住所 兵庫県宝塚市中山五月台六―一―一九―一〇二

↓京都市西区大枝北稲西町四―一―一―一〇―四〇三

郵便番号 六六五

↓六一〇―一―一

電話番号 ○七九七―八八―五三三六

↓〇七五―三三―三五九五

○谷田孝之 住所 広島市安佐南区祇園町東山本六〇四

↓広島市安佐南区山本九―三三―四

○榎 一雄 住所 東京都目黒区東山二―二〇 RN 45

↓藤沢市藤ヶ岡 一―13、二三―二〇二

郵便番号 一五三―二五―一

電話番号 〇三―七二―三七九八

↓〇四六六―二四―一九四一

新入会員

石井米雄

ISHII Yoneo

京都市左京区山端森本町六―四 郵便番号六〇六

電話番号 〇七五―七九―七六六二 京都大学

東南アジア研究センター 東南アジア史

森安孝夫

MORIYASU

大阪府枚方市禁野本町二―一―二七五一 郵便

番号五七三 電話番号 〇七二〇―四〇―〇三八

Takao

四 大阪大学助教授 東洋史(ウイグール研究)

明神 洋

MYOJIN

船橋市東中山一―一七―九 第二菅原荘一〇一号

郵便番号 二七三 電話番号 〇四七三―三五―

Hirohi

八四五七 早稲田大学大学院(後期)学生 中国

宗教史

○編集後記

京都で初めて開かれた会員総会は、盛況のうちに終了しました。とりわけ、座談会「東洋学各分野における戦後日仏交流の歩み」は、いかにも学会の総会にふさわしい企画で、その「続き」を、再び京都か東京では是非とも聴きたい、という声が強くなりました。事務局としてもそれを望んでやみません。その好企画の立案も含めて、総会の準備・運営に当たりました関西地方の役員、会員の方々、とりわけ全てにわたって御配慮頂いた大地原評議員と、また日仏学館のヴィエ館長に、事務局からも厚く御礼申し上げます。

その総会の席上、「会員消息」欄に、会員全部の自己紹介を載せたかどうか、という要望が出され、大方の賛同が得られました。一回で全員を掲載できるかどうかわかりませんが、いずれアンケート用紙を作ってお送りしますので、近況報告なども含めた自己紹介の資料をどうぞお寄せ下さい。

超多忙の石沢、金岡両会員から、貴重な学界動向記事が寄せられました。該当分野の方々には、今後必読の文献になりそうです。

(F・F)

